

かんちゃざん
菅茶山 (1748~1827)

ときのり れいけい つうしょう たちゅう ごう ちゃざん
名は晋帥、字は禮卿、通称は太中、号は茶山。

菅茶山は、酒造業で神辺東本陣主人も勤めた菅波櫛平と半の長男として延享5年(1748)年2月2日、備後の国安郡川北村(現在の福山市神辺町川北)に生まれた。

19歳のとき京都に遊学し、初め古文辞学を市川某に、古医方を和田泰純に学んだ。しかし、古文辞学の非を悟り朱子学の那波魯堂に入門した。那波門下の兄弟子には備中鴨方の西山拙斎がいる。遊学は6回に及び安永2(1773)年・安永9(1780)年には大坂で頼春水や『混沌社』社友と交わっている。

安永4年(1775)年28歳のとき、最初の弟子となる藤井暮庵が入門し、神辺に私塾を開設した。その名称は、天明5(1785)年に「金粟園」、寛政4(1792)年頃には「黄葉夕陽村舎」「閭塾」と称した。さらに、寛政9(1797)年、福山藩の郷校となり「神辺学問所」「廉塾」と改めた。塾は3室20畳の講堂、茶山居宅、寮舎、祠堂、書庫などからなる。塾では、菅茶山とともに藤井暮庵・頼山陽・北條霞亭など都講(塾頭)による四書五経を中心とした講釈がなされ、寺子屋などの初等教育を修了した10~20歳代の多くの階層にわたる塾生が2~3年にわたって学んでいる。

享和元(1801)年、福山藩の儒官となり、藩校弘道館で講釈を始めた菅茶山は文化元(1804)年・文化11(1814)年の2回江戸詰を命ぜられ、藩主阿部正精直属の教授となり、文化6(1809)年には『福山志料』を、文政2(1819)年『福山藩風俗問状答書』をまとめている。

「宋詩に学べ」という文芸運動を西日本で大成した菅茶山は「当世随一の詩人」と評され、詩集『黄葉夕陽村舎詩』の発行は、多くの文人墨客の来訪を促した。

文政10(1827)年8月13日、菅茶山は80歳で病歿し川北村(現在の神辺町川北)網付谷に葬られた。その墓碑は、頼杏坪の撰文である。

『廉塾ならびに菅茶山居宅』は昭和28(1953)年に国の特別史跡に、『菅茶山の墓』は昭和15(1940)年に広島県史跡に指定されている。